

## 夕顔巻における中将の君の「いみじき」返歌

——『無名草子』の人物評を手がかりにして——

安 道 百合子

### はじめに

『源氏物語』夕顔巻に、光源氏と、六条の君に仕える中将の君と呼ばれる女房との、贈答歌がある。光源氏と夕顔との恋愛を主軸とする夕顔巻にあって、ともすれば読み過ぎられても仕方ない一挿話であるにも関わらず、古来、注目度は高い。その理由を考えると、『源氏物語』本文に「絵に描かまほしげなり」と明示している如く、この朝の見送り場面が絵になる優美さを兼ね備えているのであり、それを受けて、この場面の絵が、室町時代以降類型化を著しくする源氏絵の一つとして継承されてきた経緯があるからであろう。

そうした享受の先蹤として、『無名草子』をとらえることも、あながち的外れではあるまい。『無名草子』には、中将の君が「いみじき女」として取り上げられ、この場面が「いみじきこと」に取り上げられている。『無名草子』に見える『源氏物語』批評

の在り方は、当代の『源氏物語』享受のひとつの在り方を示しているばかりでなく、その後の『源氏物語』享受に大きな影響を与えたと考えるのは、ごく自然なことであろう。

ともかく、そのような名場面と認識されている、源氏と中将の君との贈答場面であるが、その場面の解釈は必ずしも定まっているとは言いがたい。とくに中将の君の返歌の解釈は先行論で一致していない。この問題を考えるにあたり、中将の君を「いみじき女」とし、この贈答場面を「いみじきこと」のなかに組み込んだ『無名草子』の意図を、文脈に即して読み取り、そのことを手がかりにして、『源氏物語』本文に立ち返り、解釈を明らかにすることもまた、本文解釈のひとつの方法としてあり得るのではないかと考えた。小考は、『無名草子』の「いみじ」という評価語について考察するとともに、それを手がかりにして中将の君の返歌の解釈を明らかにしようとするものである。

## 一 『無名草子』の論の展開

『無名草子』は冒頭、老尼の登場を語り、彼女が行き着いた「檜皮屋の棟」での女房たちの座談の形式で物語批評がはじめられ、話題は、撰集・女性評へ次々と展開していく。物語批評中、『源氏物語』批評にもっとも筆が費やされ、(1)巻々の論、(2)女君批評、(3)男君批評、(4)ふしぶしの論という順に、着眼点を変えつつ、話題は途切れない。一見思いつきのような展開でありながら、整然と整えられたような印象をも与える不思議な作品である。座談開始の「すてがたきふし」の論に取り上げられる月・夢・文などの「素材」にしても、「あはれ」「めでたし」などのいわゆる評価語でまとめられる人物や場面にしても、現代の読者たる私たちは、とかく、現代の評論書のような整然とした世界を想定しがちであるが、果して、その内実はそう整然とは説明しにくいところがあるのも事実であろう。(1)と(4)と題目風に記したように、話題はおおまかにその焦点を定めているものの、ゆるやかに行きつ戻りつしながら展開しているようだ。そのような評価語のひとつに「いみじ」という語があり、「いみじき女」「いみじきこと」の論についても、そのようなわかりにくさを含んでいるようである。

(2)女君批評は、語り手のなかでもひとときわ若く、好奇心旺盛で、あれこれと古参の女房たちに質問する役回りの「若き人」が

口火を切る。「めでたき女は、誰々かはべる」。すると、別の女房が「桐壺の更衣。藤壺の宮。葵の上の我から心用る。紫の上さなり。明石も心にくくいみじ」と簡潔に答える。その「いみじ」を受けて「また」別の女房が「いみじき女は」と語り始める。ここでは、人の名をあげるにとどまらず、その理由が語られる。以下、その部分を引用するが、便宜上五つにわけて、記号を付す。

a 「いみじき女は、朧月夜の尚侍。源氏流されたまふもこの人のゆゑと思へば、いみじきなり。『いかなる方に落つる涙にか』など、帝のおほせられたるほどなどいといみじ。

b 朝顔の宮、さばかり心強き人なめり。世にさしも思ひ染められながら、心強くてやみたまへるほど、いみじくこそおぼゆれ。

c 空蟬も。それもその方はむげに人わろき。後に尼姿にて交らひるたる、また心づきなし」など言へば、「空蟬は、源氏にはまことにうち解けず、うち解けたりと、とりどりに人の申すは、いかなることにか」と言ふ人あれば、『尋木』といふ名にて、うち解けざりけりとは見えてはべるものを。悪しく心得て、さ申す人々も時々はべるなめり」と言ふ。

d 「宇治の姉宮こそ、返す返すいみじけれ。

e また、六条の御息所の中將こそ、宮仕人のなかにいみじけれ」

「めでたき女」が簡潔であったのにくらべて「いみじ」の場合に

理由付けがなされているのは、「いみじ」だけでは、評価の内実がわからないからであろう。「いみじ」の語義は、たとえば『日本国語大辞典』で「善悪ともに、程度のはなはだしいことを表わす」と記されるように、程度の甚だしさがその基幹にある。それゆえ、その評価が良いとか、悪いとかをにわかには定める性質のものではなくて、常識の範囲では想像のつかないような行動や物語のうえでの役割などに対して「いみじ」という評価を与えているものと思われる。そもそも一人一人に「いみじ」と評したくなるような想定外の何かがあり、それを説明しているのだと考えられる。a b d e はそれぞれ文末を「いみじ」でむすんでいるが、c 空蟬の場合はそうではない。「その方は」と続いていくことから、b 権を話題にしたついでに、「心強くてやみたまへる」性質に通じるものを持つ空蟬が連想されたに違いない。だが、空蟬の場合には、いみじと言いつつ切れなくて「心づきなし」と結んだのである。それを受けて他の女房の質問がはさまれるのは、そうした評価が恣意的な側面を持つことを端的に示している。そして c 空蟬については最後まで「いみじ」とは評されない。

「いみじき女」と語り始めつつも、一人の女房の見解で収まるような場ではなく、話題の関連が空蟬への連想を呼びつつ、それは「いみじ」とはいい得ないで終わる。つまり、この批評は、語る人物の恣意的な連想や迷いを反映しつつ、また聞き手の質問や異議をはさみこみながら、進められているのである。整然と説明し

にくいのはそのために他ならない。

このような「いみじき女」について、たとえば『古典集成』は「いみじき女とは、男性に対し、情の強さを示した人」とまとめるが、そのようにひとくくりにはなかなかできないのが、むしろ「いみじき女」であり、「いみじ」と評される性質なのではないか。「めでたき」明石の君について「心にくくいみじ」き面を認めたり、この後に続く「好もしき人」の花散里について、夕顔を子とした点をとらえて「いみじ」とするの、そういうことである。

そんななかで、ともかく、e 六条の御息所の中將は「宮仕え人の中にいみじ」と評されているわけである。ここで、特に注意されるのは、最後に挙げられる「中將」ただひとり、他の「いみじき女」とは身分が異なるということである。ならば女たちは、いづれも光源氏（d は夕霧）と対等な相手となる姫君ないしは女君と称される人物である。ここに、女房である彼女がさも同列であるかのように登場しているのは、やや違和感を感じる。しかし、その理由は、続く「ふしぶしの論」の「いみじきこと」に、彼女が再度取り上げられたことから類推され、それはすなわち、夕顔巻における、源氏との贈答歌における、返し方の巧みさということに尽きる。

## 二 「いみじき」の論

さて、それを確認するためにも、人物評にちょうど対応している「いみじきの論」の「いみじきこと」を読んでみたい。すべてを引用すると、長くなるので、私に記号を付して部分的に引用することにした。

①「いみじきこと。六条わたりの御忍びありきの暁、出でたまふ見送りきこえに、中将の君参るを、隅の間の高欄のもとにしはひき据ゑたまひて

咲く花に移るてふ名をつつめども折らで過ぎうき今朝の朝顔

『いかがはすべき』とて手をとらへたまへるに、

朝霧の晴れ間も待たぬけしきにて花に心をとめぬとぞ見るおほやけごとに聞こえなしたるほど、いみじくおぼゆ。

②また、忍びて通ひたまふところの門の前を渡るとて、声ある随入して、

朝ばらけ霧立つ空のまよひにも過ぎうかりける妹が門かなと二声ばかり歌はせたまへるに、よしある下仕へを出だして、

立ちとまり霧のまがきの過ぎうくは草のとざしに障りしもせじ

③また、『花宴』こそいみじけれ。…(中略)…などあるも、い

といみじくおぼゆ。

④また、齋宮の御くだりのほどどもこそ、何となく神さび、いみじけれ。…(中略)…また『伊勢まで誰か』などあるもいみじ。

⑤また、流されたまふほどのことども、返す返すいみじけれども…(中略)…

⑥また、常陸の宮の…(中略)…申しても申してもいみじともおろかなり。

⑦源氏、野分の朝、…(中略)…見ありきたるこそいみじけれ。

⑧姫君の御方にて…(中略)…文書きたまふほどいみじ。

⑨宇治のゆかり…(中略)…いみじきところどころ多くはべれど、…(以下略)

以上、九項目にまとめる。

この冒頭①に六条わたりの中将の君との贈答がおかれている。さきに「いみじき女」の末尾に置かれた中将は、またここで、「いみじきこと」とはじまり、「いみじくおぼゆ」と終わる文脈において取り上げられる。このあとに書かれる②の話のなかには「いみじ」の語が出てこない。しかし、いずれも、朝の場面、源氏が戯れに贈る歌に対して女房格の女性の切り返しの返歌である。続く③は源氏と朧月夜との出会いの場面と一旦別れた後の再開場面。須磨退去の引きがねにまでなった朧月夜に、まだ源氏は執心を残して歌を贈る、その歌に対して「いみじ」と評され

ている。また④も、あれほど気の張る相手だった六条御息所が、いざ源氏との別れを決心して娘とともに伊勢に下る段になって、しみじみと別れを惜しむ源氏の歌を「いみじ」とする。③④は別れることが前提としてありつつも、なお執心をとどめる源氏の歌をとりあげる点で共通する。⑤は須磨流罪という事件そのものの意外性がまずあって、それにまつわる話があるはず、という前提で批評そのものは省略されている。⑥は源氏が末摘花のもとを再度訪ねる意外性とその熱意を「いみじ」と評し、⑦⑧は夕霧の雲井雁に対する執心とそれに基づいての行動、すなわち、野分の朝の見回りの途中、明石の姫君の硯を借りてまで手紙を書くというその意外性を「いみじ」と評しているわけである。③以下すべての項目に「いみじ」の語は含まれている。

一つ一つの「いみじきこと」は、それぞれ単独の場面のようでありながら、源氏の贈歌に素直に応じない女房の切り返し歌を取り上げ、次に、別れ際に意外にも執着を残す源氏の歌を取り上げ、さらに執心に由来する想定外の行動が取り上げられる、というように、ゆるやかに流れる連想の経緯が感じられる。いずれも恋愛の主要場面とは言いがたいが、登場人物の心の変化のごく一部、当然予想される物語の展開にさからうような人物の言動を切り取って取り出してきたのであり、そのような想定外のことに対して「いみじ」という評価語が与えられているようである。

このように「いみじ」が繰り返し返されているなかで②のみが「い

みじ」を含んでいない。省略されたのだとしても、これは、ちょうど空蝉が「いみじき女」で取り上げられたように、①の話題に伴って自然と連想された②の話題であるという、その連想の経緯がよりはっきりと目に見えていると考えられる。

### 三 和歌の解釈の差異

さて、①の話題は、『源氏物語』夕顔巻、「六条わたりの御忍び歩き」を続けている源氏が、初秋のある朝、女の寝所を後にする情景である。物語は、秋を迎え、「とけがたかりし御気色をおもむけきこえたまひて後、ひき返しなめならんはいとほしかし」と、源氏の熱心さがうってかわってなおざりになったことを、御息所に同情的に語る。また「女」の「ものをあまりなるまで思ししめたる」性格にも触れ、この男女の間にも秋風が吹き始めたことを予感させる。その二人が一夜をともした翌朝、「霧のいと深き朝、いたくそそのかされたまひて」源氏は「ねぶたげなる気色」で出てゆくわけだが、その源氏を見送りに登場するのが、中将の君であり、彼女は「御格子一間上げて」、「御几帳ひきやり」などして、御息所が源氏を見送りやすいように気を配る。御息所の目の届かない、廊の方にくると、中将の君自身が供としてつき従う。「紫苑色のをりにあひたる、羅の裳あざやかにひき結ひたる腰つき、たをやかになまめきた」と描かれる彼女は、若々しく美しい。そんな中将の君を、源氏が高欄に「ひき据ゑ」、詠み

かけたのが、「咲く花に」の和歌であり、それに応じたのが朝霧の晴れ間も待たぬけしきにて花に心をとめぬとぞ見るである。

『源氏物語』のこの和歌の解釈について、先行論が一致していないことをまず確認しておきたい。

中将の君の和歌の解釈上の問題は、結句の「とめぬ」の「ぬ」が打ち消しの助動詞か、完了の助動詞かという点にある。

『新全集』の現代語訳は「朝霧の晴れてくる間もお待ちにならずお発ちになるご様子で、花に心をおとめになっていらっしやらぬものとお見受けいたします」とし、「花」について「御息所におりかえて切り返した」との注を加えている。『旧大系』も同様に「朝霧のはれ間も待たないでお帰りなさる源氏の御様子では、御息所に御心をお留めなさらない方だと私は見ます」と訳し、こちららははっきりと「花」のところを「御息所」と訳している。また、打ち消しの助動詞の「ぬ」とすれば連体形であることを現代語訳にも生かし、「方」という名詞を補っている。さかのぼって『源氏物語評釈』ではやはり打ち消しの意を出しているが、ここには、完了と採る時枝誠記氏説を批判して「おっしゃる通りとお見受けします、では、贈答の歌にならない」と解説を加えている。

対して、完了ととるのは、おそらく時枝氏の解釈がはじめである。これについては、一旦否定されたかに見えたが、近年の比較

的新しい注釈書である『新大系』『源氏物語注釈』が完了説を採っているのが、気にかかる。『新大系』は「朝霧の晴れ間も待たぬ様子的まま、花のような貴方に心をすっかりとどめてしまふと見ますよ」と訳し、「花」を源氏の比喩として、「女主人の気持ちや付度する詠みぶり」と説明がある。また『源氏物語注釈』は、「朝霧の晴れ間も待たないあわただしいお帰りのご様子ですが、しかし内心では美しい女主人をいとお思いになっていらっしやるものとお見受けします」と訳し、「花」は御息所の比喩でありつつも、完了とする理由を「ぬと」の部分が確定判断の表現であるとし、「源氏物語において助詞「と」が連体形に続くものは、『係り結びの結びである』か『構文上体言相当句を形成するもの』であるかに限られる」と説明する。その後、吉見健夫氏は、完了説を整理して、より説得力のある論にまとめられた。源氏の歌の上句に「咲く花に移る蝶」の意味を認め、「中将の君を朝顔に喩えながら懸想する形を取」る歌としたうえで、「源氏が庭前の朝顔そのものに執着しているものと、侍女として女主人の立場を慮って、巧みにすり替えて歌い返した」ものとされたのである。源氏歌の解釈には従えるが、完了「ぬ」である理由について、後接の「と」との関係性からのみ説明された点には不満が残る。

やや乱暴にまとめてしまうと、打ち消し説を採るほうは、贈答歌としての和歌の性格を重視しており、完了説を採るものは、

「ぬ」＋「と」の文法的解釈を重視しているということであろう。贈答歌という性格に関して言えば、花が何をたとえていると見るべきか、上句と下句がどういう関係か、そして、なぜこれが源氏の歌に對しての巧みな返歌に成り得るのかを明確にする必要がある。逆にまた、完了説についても、「心」を「とむ」という表現に接続する用例の検討が必要であろう。

さらに、これが『無名草子』に「いみじ」と評されることを考慮すれば、返歌の性質が「いみじ」と評されるにふさわしい歌だということが、明確にされるような、解釈が提示されるべきだと考える。

#### 四 「心」を「とめ」た表現、「心」を「とめ」ない表現

まず、完了説の根拠となる、文法的解釈を確認したい。完了の終止形が「と」に続くことに問題はない。問題になるとすれば、上接する動詞が「とむ」であることか。打消し説の場合は、連体形に「と」が後接するような用例が認めうるかどうかが問題となる。

基本的な手続きとして、和歌において「とめぬと」の用例が他にあるかどうかを確かめておきたい。「とめぬと」という表現そのものを含む歌は『玉葉和歌集』に一首ある。

三条右大臣にともなひて花見侍りけるに、いそぐ事あり  
てかへるとて、よみ侍りける  
中納言兼輔

181 桜花にほふをみつゝかへるにはしづ心なき物にぞありける  
返し  
三条右大臣

182 たしかへり花をぞわれはうらみつる人の心をとめぬと思へば

ここに「心」「とめぬと」というほぼ近い表現が存する。

兼輔の歌は、三条右大臣（定方）と一緒に花見をしたが、急用ができて帰ることになり定方に詠みかけたもので、桜の花が咲き誇っているのを見ながら帰るといふのは、なんとも心落ち着かないことだ、というような意味である。それに対する定方の返事は、岩佐美代子氏の訳では「今更、あなたより寧ろ花の方を私は恨めしく思いましたよ。帰ろうとする人の心を引きとめるだけの魅力も發揮しなかったのかと思えばね」とされる。花を見ないで返ってゆく兼輔に應じる歌であるのだから、「とめぬと」の「ぬ」が完了になるはずはなからう。この歌は、定方の歌だとすると、成立は『源氏物語』をさかのぼり得るが、『兼輔集』『三条右大臣集』に伝えられる本文は、三句以下が「うらみこし人のこころのどけからねば」となっている。新しい本文である可能性もある。「心をとめぬ」を完了としたときに、「心を留めた」ではなく、「落ち着いた心をなくすほど」心を執着させた」というような解釈が成り立つとすれば、『兼輔集』の意味に近くはなるが、無理がある。

たしかに、完了「ぬ」＋「と」の用例は、「あききぬと目には

さやかに見えねども風のおとにぞおどろかれぬる」(『古今和歌集』巻四・秋歌上・169・藤原敏行朝臣)をはじめ、多数見出せる。格助詞「と」に続くという点を重視すれば完了「ぬ」と解する説を否定する要素はないようにみえるが、では、「心」を「とむ」という表現に完了の意味を添えるときにはどのような表現を用いるものだろうか。

「あかずおもふ心は花にとめつるをとまらぬ人に身をばまかせて」(清輔集・44)、「草の庵に心はとめついつか又やがてわが身もすまんとすらん」(長秋詠藻(俊成)・363)、「みるまに心はとめつ清見がた関守る浪もたちかへれども」(壬三集(家隆)・992)、「よしの山うきよのほかにのがれきて中中花にこころとめつる」(守覚法親王集・16)。

「みそめずはあらましものを山ふかみ花に心のとまりぬるかな」(続後拾遺・99・題しらず・伊勢)、「いそぐべき世とはしるるとこ夏の花に心のとまりぬるかな」(公任集・77・なでしこをみ給ひて)、「くれぬとて立かへれども山ざとの花にこころはとまりぬるかな」(草庵集(頼阿)・161)、「世中はおもひでもなしとおもへども花に心のとまりぬるかな」(統詞花・62・橘栄職)、「ふるさとはまだとほけれどみぢばのいろにこころのとまりぬるかな」(後拾遺・345・藤原兼房朝臣)などの用例がある。

用例は、『源氏物語』当代よりやや下るものが多いが、これらからわかるのは、自動詞「とむ」に続く完了形は圧倒的に「つ」

である。完了「ぬ」に続くのは他動詞の「とまる」である。すなわち、和歌においては、「心」を「とめつ」あるいは、「心」が「とまりぬ」とするのがごく一般的ではないかと思われるのである。「心」を「とめ」た表現という意味では、「とめぬ」とするの

は、極めて考えにくい選択の表現だと言えよう。

一方、打消しの助動詞の連体形に「と」が接続する古い用例を見出し得ない以上、打消しであると断定することも難しい。かといって打消しの意味ではほかにどのような表現が考えられようか。「とめない」を「とめず」として「とめずとぞ」という表現が成り立つか、といえは、それはまた否であろう。和歌という音の制約があり、かつ音の響きを重視する文学形態に「ずとぞ」のような音の連続は女の歌として優美ではない。また、ここでは、上の句の「またぬけしきにて」に打消しの「ぬ」が使われている。「とめぬ」のあとに、「けしき」のような体言を補うなら、連体形であることの問題は、無い。「ぬ」は打消しと見るのが良いと考える。

## 五 「おほやけごと」の意味

では、そのとき「花」は何を意味するだろうか。そもそも源氏の歌をまともにはうけると、「花」は中将自身のこととなる。

(あなたは私に気持ちがあうつるとおっしゃいます)朝霧の晴れるのもお待ちにならないで早々と出ていかれる御様子で



は、その花（である私）には心はとどまっていはいないと見えます。まず。

というように、源氏の「うつる」という浮気を受けつつ、花にころを「とむ」までには至らない、というだけで強烈な切り返しとなる。もちろん、源氏ほどの人物に対して、一女房が「花」に譬えられた女として、そんな返事をしたら、その大胆不敵さにおいて「いみじ」と評されて当然であろう。そのような率直な返事ではさすがに身の程しらずであるから、「おほやけごと」にて返事をしたのである。

「おほやけごと」という語は『源氏物語』に23例見え、「公事多く奏し下す日にて」（紅葉賀三四五頁）「ただ公事に、そしうなるもの師どもにここかしこに尋ね」（花宴三六三頁）など公的行事や職務を意味する。宮仕えをする女性が主格におかれる文脈では、「尚侍、宮仕へする人なくては、かの所のまつりごとしどけなく、女官なども、公事を仕うまつるにたづきなく」（行幸三〇一頁）「公事などにもおぼめかしからず、はかばかしくて」（藤袴三三六頁）など、女房としての職務という意味に使われている。いずれも、まず「朝廷・国家の政務」という意味が強い。ここでも、「御息所につかえる女房の職務として」和歌を詠んだことにはなるが、その表現はかなり大仰な言い回しであることが確認できよう。すでに引用したように、この場面では、御息所の寝所を出る源氏を、御息所が見送ることができるよう、中将の君は行動して

いる。御息所が見送りできなくなったそのあとを見送るのが中将の君の役割であるが、この一連の描写は、御息所の視線を展開するものとして読まれている。御息所の視線をうけつぐものとして中将の君の視線があるとも論じられている。まさに、ここにおいて、中将の君は女主人六条御息所の代わりを務めており、この和歌も主人になリかわって答えたとするのが妥当である。とするときに、これが挨拶の歌にすり替えられてよいのだろうか。否である。社交的な歌にすり替えたのでは、女主人の視線をうけつぐ女房の職務としては不十分ではないかと思う。まともに受ければ中将の君自身のこととなる「花」、その花に心をとめていないように見えますよ、という歌であるが、それを、あくまで、「公事」つまり重々しく逆らい難い職務を果たしているとの役回りで答えたことに意味はあるのである。

## 六 若紫巻の贈答歌との対照性

ここで、もう一度、『無名草子』の「いみじきこと」の①②の並びの意義を振り返りたい。

①は、夕顔の巻、源氏十七歳の秋であった。対して、②のほうはちょうどその一年後、若紫の巻のやはり挿入的な話題である。源氏は、尼君をなくした若紫を氣遣って見舞いに訪れる。ちょうど「霰降り荒れてすごき」夜でもあり、困惑気味の乳母をよそに、強引に宿直人を買って出て泊り込む。当然、まだ少女でしか

ない若紫と男女の関係など有り得ない。その翌朝の風情であるが、「いみじう霧りわたれる空もただならぬに、霜はいと白うおきて、まことの懸想もをかしかりぬべきに、さうざうしう思ひおはず」と語られる。書き出しは、ちょうど一年前の、六条わたりの忍び所を出かけようとする、霧深い朝によく似ている。ここには「まことの懸想」という表現があり、相手が誰であるかは重要ではなく、場面そのものが「乳母にその強引な行爲を『いで、あなうたてや、ゆゆしうもはべるかな』と咄かしめ、自分自身も『うたて』と感した、喪中の、しかも少女と一夜を共にした源氏を、ある意味で浄化する役目」を持っていたとする興味深い指摘がある。以下②の場面を引用する。

いと忍びて通ひたまふ所の道なりけるを思し出でて、門うち叩かせたまへど、聞きつくる人なし。かひなくて、御供に声ある人してうたはせたまふ。

あさばらけ霧立つそらのまよひにも行き過ぎがたき妹が  
門かな

と二返りばかりうたひたるに、よしある下仕を出だして、  
立ちとまり霧のまがきの過ぎうくは草のとざしにさはり  
しもせじ

と言ひかけて入りぬ。また人も出で来ねば、帰るも情なけれど、明けゆく空もはしたなくて、殿へおはしぬ。  
をかしかりつる人のなごり恋しく、ひとり笑みしつづ臥し

たまへり。日高う大殿籠り起きて、文やりたまふに、書くべき言葉も例ならねば、筆うち置きつつさびぬたまへり。をかしき絵などをやりたまふ。  
(二四六頁)

ここにおいて、源氏は供を介して歌を歌わせる。霧がたちこめてあたりの見分けがつかない中にも、素通りしかねるあなたの家の門であるよ、と呼びかける。それに応じた歌は、古歌を踏まえている。

女のもとにまかりたりけるに、かどをさしてあげざりければまかりかへりてあしたにつかはしける 兼輔朝臣

899 秋の夜の草のとざしのわびしきはあくれどあけぬ物にぞ有りける

返し 読人しらず

900 いふからにつらさぞまざる秋のよの草のとざしにさはるべしやは

〔後撰和歌集〕卷十三・恋(五)

「女のもとを訪ねたけれども戸を開けてもらえなかった、それなのに夜は明けてしまった」と恨みの歌を送った兼輔に対して、女は「そんなふうにおっしゃるからよけいあなたの冷たさが身にしてみる、本当に私を訪ねる気があるなら草の戸に妨げられることがありますよか」と返したのである。これを踏まえた若紫の歌は「霧の垣根が素通りしにくいのなら、(立ち寄る気があるのなら)草の戸など何の妨げにもなりませんまいに」という意味になる。ま

さに、男の歌をまずそのまま受け止めたいうえで、それなら、と切り返す恋歌の常套である。

①②の贈答歌は挿入的な話題の一部と云う点で近似しており、秋の朝という時節、源氏が女性のもとで必ずしも満たされない一夜を過ごした翌朝、別の気安い女性に声をかけ、機知に富む歌を返されるといふ設定が似通っているわけである。

しかも、男の歌はあくまでも「恋の気分」が重要である。前者は御息所のもとでは芯からくつろげない源氏が「女房」という格の下がる女だからこそ気を許して声をかけているのであり、後者の源氏は本来的でない男女の一夜を過ごしたのちに、朝方にふと思ひ出した女のために声をかけてみたというものである。男からすれば、恋の風情・恋の気分が大事なのであり、たいして重みのない女への声かけなのである。だからこそ、若紫巻の「よしある下仕」も、女主人にかわって恋歌の定石通りに切り返しの歌を詠んだ。このとき、②の話題は、①の話題から連想されたものであった、というのみならず、それぞれの「いみじ」さの内実の違いを示す比較対象のような形で提示されていると見ることができ

る。

夕顔の巻における、①の挿入話の意義については、「夕顔」という花の表象世界と「朝顔」の表象世界との対比、あるいは、女君みずから歌を詠みかけた「中の品の女」である夕顔と、仕える女房たちのふるまいも含めて「上の品の女」である六条御息所と

の対比があざやかに描かれていると見ることは、すでに論じられている通りであろう。<sup>13</sup>しかし、『無名草子』の並びを意識してみるなら、巻内の対照性を読み解くにとどまらず、秋の霧深い早朝、男の懸想と女の切り返しというまったく同じ趣向が、夕顔巻と若紫巻とに、ちょうど一年間の間をおいて、やはり対照的に描かれていることにこそ意義があるわけである。

「いみじ」というからには、相手の期待や想像をはるかに超えた返事であったという驚きや意外性がなくてはなるまい。若紫巻では男のほうが、自分の都合で一方的に「まことの懸想」をもとめたのに対して、女のほうは、古歌にもとづいて即座に返答した。それも、男の懸想が所詮浮ついたものであることを、教養に裏打ちされた機知に富んだ歌でもって指摘するという、まさに切り返しと呼ぶにふさわしい歌だったという点は動かない。切り返しだからこそ、恋歌の贈答として成り立つ。貴婦人に仕える女房たるもの、このくらしい返歌が即興でよめずにどうするものか。

しかし、御息所に使えた中将の君の切り返しの巧みさは、それだけではない。一見、自分を「花」とたとえた源氏に正面切って反論しているような詠みぶり。「いみじき女」で、源氏と対等の女君たちとならび評されたことに思いを致して、この歌を見たとき、決して女主人の代わりの歌とは思えない。まさに源氏の予想を裏切る歌がまず語られたのである。その後の地の文に

おほかたにうち見たてまつる人だに、心とめたてまつらぬは

なし。ものの情知らぬ山がつも、花の蔭にはなほ休らはまほしきや、この御光を見たてまつるあたりは、ほどほどにつけて、わがかなしと思ふむすめを仕うまつらせばやと願ひ、もしは口惜しからずと思ふ姉妹など持たる人は、いやしきにても、なほこの御あたりにさぶらはせんと思ひよらぬはなかりけり。(二四八頁)

と語られるような、そんな光源氏が相手である。だれでもがなびいてしまふ、娘を持つ親は誰しもそんな光君のそばに仕えさせたいと願う、そんな光源氏の誘いに応じなかつたのである。読者はまず歌を読む。光源氏に正面から反論する女房の歌は、想定できない返しである。そのあとに、その歌を素知らぬ風に、「おほやけごと」に詠んだという中将の描写がある。女としての私自身の歌ではない。これはあくまで公の任務として詠んでいるのだと、彼女はすまして切り返していた。それこそが「いみじき」と評され、冒頭に掲げられた所以であろう。

### おわりに

『源氏物語』のように享受の歴史の長い物語には、享受史のそれぞれの時点で定められる解釈があると思う。『源氏物語』より約二百年成立の下る『無名草子』の解釈をもとに、『源氏物語』本文の解釈を定めることには、なお慎重にならねばなるまい。しかし、現存する資料のなかでははるかに当代の読者に近い人物によ

る物語批評であり、しかも和歌に通じた俊成卿女のような人物の手になることを考慮すれば、その解釈に照らして『源氏物語』を読み直すこともまた有効であると思う。そのとき、また、『無名草子』のすぐれた批評のあり方にも気付かされる。『無名草子』の「いみじきこと」という評価は、和歌を中心に据えつつ論を展開してはいるが、和歌を含んだ物語の文体全体を見ているのであり、場面の意外性をあざやかに切り取って見せる、すぐれた選択眼に基づいているとも思われるのである。

### 注

- (1) 中将の君の和歌を含む場面の選択意識について、高木和子氏「国宝『源氏物語絵巻』と『無名草子』」(『源氏物語の思考』(風間書房二〇〇二年)に所収)は、絵巻の場面選択意識との関係を説く。
- (2) 『無名草子』ならびに『源氏物語』の本文引用は、『新日本古典文学全集』本(小学館)による。なお、『新全集』は同書を指し、『新大系』は岩波書店『新日本古典文学大系』本を、『旧大系』は岩波書店『古典文学大系』本を、指す。
- (3) 『新潮日本古典集成 無名草子』(桑原博史氏校注 新潮社 一九七六年)
- (4) 玉上琢弥氏『源氏物語評釈』(角川書店 一九六四年)
- (5) 時枝誠記氏『古典解釈のための日本文法』(至文堂 一九五九年)
- (6) 上野英子氏「夕顔巻における源氏と中将の君との贈答歌をめぐ

ぐる考察」(『むらさき』第十九号 一九八二年)は、時枝説への反論をしたうえで、古註の解釈の流れを整理され、挨拶歌といきれない中将の君の「切実な思い」を汲み取る論を展開されている。

に、六条邸で朝顔の花が詠みこまれたことをも、その構造に組み込んで論じられた。

(7) 山崎良幸氏・和田明美氏『源氏物語注釈 二』(風間書房 二〇〇〇年)

(8) 吉見健夫氏「源氏物語における女房の和歌——夕顔巻の源氏と中将の君との贈答歌をめぐる——」『源氏物語と平安文学 第四集』(早稲田大学大学院中古文学研究会編 一九九五年)

(9) 岩佐美代子氏『玉葉和歌集全注釈』(笠間書院 一九九六年)

(10) 三田村雅子氏『源氏物語感覚の論理』(有精堂 一九九六年)は、中将の視線が「六条御息所の視線を確実にうける」ものとし、この一連の挿話を「露わに語り尽されることのない気位の高い女主人の内面を、女主人に代って雄弁に物語る女房視点の物語」と位置づける。原岡文子氏『源氏物語の人物と表現 その両義的展開』(翰林書房 二〇〇三年)にも六条御息所の視線に注目した論がある。

(11) 『源氏物語の鑑賞と基礎知識⑤若紫』(至文堂 一九九九年)

(12) 引用は『新編国歌大観』による。

(13) たとえば、『新全集』頭注に、中将の君の和歌について「朝顔と夕顔、上の品と中の品などで対照的」とあるなど、夕顔巻内における対照性は諸注釈書でも概ね一致した見方となっている。また、田坂憲二氏「朝顔の姫君の構想に関する試論」(『源氏物語の人物と構想』和泉書院 一九九三年)は、朝顔が六条御息所をはじめ、夕顔や空蟬と対比的に描かれる構造を説くなか